

劇場版・結城友奈はティマーである わたしたちのロボトルゲーム！

渚のグレイズ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神世紀303年の夏に起きた『デジタルウォーズ』

その余波は、意外な影響を世界に与えたのであった……

人々に大流行し始めたメダロット。その秘密とは!?

裏で渦巻く企業の陰謀。その時、勇者達は――

今ここに、ゆゆゆ×デジモン×メダロットという、異色のコラボレーションが実現する!

劇場版・結城友奈はティマーである

わたしたちのロボットゲーム!

大人気(誇張表現)、公開中!!!

こちら、結城友奈はティマーである<https://syosetu.org/novel/146604/> #hamelnovel #hmn146604

の、劇場版的な作品となっております。

こちらから先に読んでいただければ、幸いです。

目次

chapter 1	ことのはじまり	1
chapter 2	メダルのロボット、メダロット	4
chapter 3	メタルビートル	7
chapter 4	国防仮面とロクシヨウ	11
chapter 5	オメガナイト	14
chapter 6	はじめてのロボット その①	16
chapter 7	はじめてのロボット その②	20
chapter 8	はじめてのロボット その③	22
chapter 9	メダロット博士	25
chapter 10	メダロット暴走	27
chapter 11	もう一人の“博士”	30
chapter 12	“獣王”、起動	32
chapter 13	手掛かりは“迷子のお知らせ”	34
chapter 14	流されて・・・ここはどこ？	37
chapter 15	アルゴモン	39
chapter 16	合流	42
chapter 17	目的	44
chapter 18	メダフォース①	46
chapter 18	メダフォース②	49
chapter 19	究極のアルゴモン	53
chapter 20	藍原の遺産（パンドラボックス）	56
chapter 21	降臨、オメダモン	58
chapter 22	最後の戦い	61
chapter 23	エピソード	64

chapter 1 ことのはじまり

???????

?????

神世紀303年末日――

四国内の、とある山中。

一人の白衣の男がツルハシ片手に穴を掘っていた。
やがてツルハシは何か硬いものに当たり、男はその場を中心にスコップで掘り返し始める。

??? 「ふふふ……遂に見つけた！これが、相原の遺産……！」
土から出てきたそれを、男は丁寧に持ち上げ、土埃を払う。
埋まっていたのはどうやら金属製の箱のようだ。

その箱を地面に置くと、男は蓋を開け、中身を確認する。
中に入っていたのは、腕時計のような物と、メダル、そしてUSBメモリのような物。

この「相原の遺産」と呼ばれた物が、後に大いなる災いを招くこととなるとは、この時点ではまだ誰も、知る由もなかった……

劇場版

結城友奈はティマーである

わたしたちのロボットゲーム！

?????
神世紀305年 8月

????

この日、結城友奈は自宅でぐだっていた。

友奈「あついいい・・・」

ワームモン『ゆーちゃん、ゆーちゃん、お勉強しなくて良いの?』
机の上の端末から、ワームモンの声がする。

あれから、デジタルワールドと現実世界は元の状態に戻り、今では
端末を介して通話が出来るまでになっていた。

友奈「あつくてやるきがでてこないのおお・・・」

ワームモン『そんなの、ゆーちゃんがエアコン壊しちゃったのが悪
いんですよ』

友奈「私なんにもしてないもん・・・毎晩寝る時に冷房付けっぱ
なしにしてただけだもん」

ワームモン『それが原因で壊れちゃったんだから、やっぱりゆー
ちゃんが悪い!』

友奈「ううううううう・・・!ワームモンのいぢわる!」
それだけ言つて、友奈はぱたり、と床に倒れ伏す。

友奈「・・・あいすたべたい」

ワームモン『ママさん、冷凍庫にアイス置いといてあるって言つて
た———』

友奈「わーいアイス♪」

ワームモンからの報告に、友奈は直ぐ様飛び起きると、台所へ向
かって飛ぶように走り去って行ったのだった。

ワームモン『はっや!?!』

流石のワームモンも、これには呆れた様子であった。

友奈「はふうう〜・・・生き返る〜♪」

ワームモン『大袈裟だなあ』

ソーダ味の棒アイスを頬張って、友奈はご満悦の様子。

友奈「端末の中にいるワームモンには、この暑さはわかんないよ」

ワームモン『あんまり分かりたくもないけどねー』

友奈「・・・ワームモンは、まだこっちに来られないの？」

ワームモン『うーん・・・レイの話だと、まだまだ時間がかかるみたい』

友奈「そっかー・・・」

しばらくアイスを堪能していた友奈だったが、突如鳴り響いた端末に、思わず啞えていたアイスを落とすそうになる。

友奈「うわわわっ!? え? 誰?」

ワームモン『園子からだね。どうしたんだろ?』

友奈「はい、もしもし——」

園子『あ、ゆーゆ? おひさ〜♪今時間ある? 見せたいものがあるんよ〜』

友奈「見せたいもの・・・?」

訝しげに思いつつも、「まあ園ちゃんだし、大丈夫だよね」と考えた

友奈は、二つ返事にそれを了承するのであった。

chapter 2 メダルのロボット、メダロット

園子からの呼び出しを受け、やって来たのは玉藻市内のとあるビル。

ワームモン『これが最近噂のダイパンエンタープライズ本社ビル！』

友奈「だいばん・・・？」

ワームモン『今、みんなの間で流行ってるロボットあるでしょ？』

友奈「あー、あの・・・めだ・・・なんとかっていう・・・」

ワームモン『メダロットね。それを造っているのが、このダイパンエンタープライズ社なんだって』

テレビで見聞きした情報を思い出そうとする友奈の頭上を、蝙蝠を模したロボットが通る。

他にも街中には、様々な形のロボットが人々と共に暮らしている様子が見受けられる。

ワームモン『あれが噂のメダロットだよ。都会っというだけあつて、いっぱいいるんだねえ』

メダロット

今年四月にダイパンエンタープライズ社より発売された玩具ロボット。

全長50cm程度の玩具ではあるが、そこそこに重い荷物も運べるパワーを持ち、人間と然程変わらない知能を持ったAIを搭載している為、工事現場や災害時の救援など、様々な場所での活躍を期待されている新時代のロボットである。

友奈「メダロットかあ・・・お花の形の子とか、いるのかな？」

ワームモン『数はそんなに多くないけど、あるみたいだよ』

友奈「へー！」

そんな会話をしながら、ダイパンエンタープライズビルへと入っていく。

ダイパンエンタープライズ本社ビルの屋上には、プールが設置されていた。

そのプールサイドにて、水着姿の園子が、友奈の到着を待っていた。

園子「ゆーゆう、久しぶりなんよ♪元気してた？」

友奈「園ちゃん！うん、元気元気♪」

ワームモン『この前エアコン壊れて、さつきまで暑さにやられてたよ』

友奈「こら！余計なこと言わないの!!」

園子「あははは♪ムツチーとも仲良くしてるみたいだね〜」

と、そこにプールから何かが上がってきた。

人形のそれは、先程も街中で見かけたメダロットであった。しかし、街中にいたのとは違い、こちらはスクール水着を着用した少女のように見える。

友奈「わあ、メダロットさんも水着着るんだー」

園子「この娘は『スイマーメイツ』っていつて、私がデザインしたメダロットなんよ〜」

ワームモン『え、園子が？』

園子「うん。ここ、私が経営してるんだけど、開発部の人たちがあんまりにも男の子向けのぼっかり作るから、女の子向けのは私が考案することにしたんよ〜」

ワームモン『さらつと凄いこと言ってる……(汗)』

園子「ドルるん、ありがとね〜」

左腕に着けた腕時計のような物を操作し、園子はスイマーメイツをしまう。

ドルモン『……ふう、やれやれ。女性体を動かすことに馴れてきてしまっているね……正直、複雑な気分だよ』

友奈「え？今の、ドルモン？」

ワームモン『え……ええ？どういうこと？』

腕時計からUSBメモリのような物を抜きとりつつ、園子はいたず

らっ子の笑みを友奈に向ける。

園子『ぬっふっふっふっ♪今日ゆうーゆ達に来てもらったのは他でもない・・・まさにこれなんよ!!』

友奈「これ？」

ワームモン『この小さなUSBメモリが？』

園子「これは、Dーチップって言って、デジモンをこの中に保存することで、メダルの代わりにメダロットにセットできるようになるアイテムなんよ♪」

説明しつつ、先程の物とは別のDーチップを取り出して、友奈に渡す。

友奈「Dーチップ・・・もしかして、これがあれば・・・！」

園子「ムツチーもメダロットに乗って、こつちの世界を動き回れるんよ〜！」

ワームモン『ゆうーちゃんゆうーちゃん！早速やってみたい!!』

友奈「うん!!園ちゃん、スイマーちゃん貸してね」

園子「まあまあ、落ち着きなつてベイビー（謎イケボ）」

逸る友奈を抑えつつ、園子は連絡を取る。

園子「今丁度、新しいメダロットを開発してて、ゆうーゆとムツチーには、そのテストをして貰いたいんよ」

友奈「テスト？なんだか面白そう♪」

園子「ゆうーゆならそう言ってくれると思ったんよ。じゃ、レッツゴー！」

友奈「ゴー！」

水着の上から白衣を羽織った園子に先導され、友奈は別の場所へと移動を始めたのだった。

chapter 3 メタルビートル

園子にビル内を案内されつつ、目的の場所まで移動している最中のことだった。

ドカアアアアアアン・・・!!

友奈「わひやあ!?何!?!」

ワームモン『爆発!?攻撃でも受けたの!?!』

突如として、ビルの一室から爆発が発生した。

戸惑う友奈とワームモンに対し、園子は至って冷静に状況を分析する。

園子「下の階からだね。てことは・・・」

ドルモン『園子。どうやら、またアイツが脱走したらしい』

園子「ええ・・・またなの?」

友奈「え?え?園ちゃん何か知ってるの?」

友奈のその質問は、前から走ってくる一体のメダロットをもって、答えられた。

???「へっ!今日こそこんな場所からはおさらばしてやるぜー!!」

ワームモン『あれはKBT型メダロットの“メタルビートル”!!!ス
タンダードな射撃特化タイプとしてメダロット出始め当初から絶大
な人気を誇る機体だよ!!!』

夏凜「待ちなさーい!」

友奈「あ、夏凜ちゃんだ!」

更にそのメタルビートルを追って、夏凜もやって来た。

メタルビートル「げえ!?!まーたお前かよ!!!いい加減しつこいんだよ
!!!」

夏凜「うっさい!あんたこそ、いい加減脱走なんてアホな真似は止
めなさい!」

メタルビートル「やーだよー!あつかんべー!」

夏凜「むきー!?!?!こうなったらロボトルよ!!!力づくで分からせ

てやる!!!!」

メタルビートル「やれるもんならやってみろ!!!!」

園子「い つ も の な が れ」

友奈「いつものなんだ・・・(汗)」

夏凜「メダロット、転送!」

夏凜が園子も身につけている腕時計のような物を操作すると、夏凜の前に鎧武者の姿のメダロットが出現した。

ワームモン『おおお! SAM型メダロット “サムライ” だあ!!!! 両手のビームソードを奮って戦う烈火の鎧武者!!!』

友奈「さつきから詳しいね、ワームモン」

ワームモン『だってカッコいいじゃん!』

友奈「そっか・・・」

??? 「合意と見てよろしいですね!」

そこに突然、初老の男性が現れる。

友奈「わっ!?!どこから出て来たの!?!」

ワームモン『あ・・・あの人は!』

Mr. うるち「私、『全国ロボット競技会』公認レフェリーの “ミスターうるち” です!!!」

ワームモン『まさか本物のミスターうるちに出会えるなんて・・・!!!』

友奈「えっと・・・有名人?」

ワームモン『世界で初めて、ロボットレフェリーのA級ライセンスを獲得した凄腕レフェリーだよ!』

友奈「へ・・・」

最早友奈はワームモンの話についていけない。ただ頷いているだけだ。

Mr. うるち「これより、夏凜選手のヨシテルVSメタルビートル選手の真剣ロボトルを始めます!先に相手のメダロットを機能停止にさせた方が勝利です。勝った方は相手のパーツを一個貰えます!」

Mr. うるち「それでは！ロボトル——ファイトお！！」カーン

夏凜「行けえ、ヨシテル！」

ヨシテル「御意！」

メタルビートル「オラア！」

メタルビートルが右腕のリボルバーを射つ。

ヨシテルはそれを敢えて受け、相手の隙を伺っている。

メタルビートル「どうしたどうしたア！お前の力はその程度かあ？」

更にメタルビートルは左腕のマシンガンで追い討ちをかける。

夏凜「ヨシテル！今は耐えるのよ！」

ヨシテル「——御意！」

メタルビートル「これでトドメだあ!!!反応弾！」

メタルビートルが頭からミサイルを放つ！最早万事休す、という状況。

夏凜「この瞬間を待っていたのよ！」

ヨシテル「——！」

放たれたミサイルがヨシテルに命中する寸前で、ヨシテルがビームソードを奮い、ミサイルを切り払った！

メタルビートル「なにい!？」

ヨシテル「トアア!!」

そのままメタルビートルに飛び掛かり、一刀両断。

ヨシテル「諸行・・・無常・・・！」

メタルビートル「がはあ！」

メタルビートルは機能停止となった。

Mr. うるち「機能停止！勝者、夏凜選手のヨシテル!!」

夏凜「まったく・・・毎度毎度、お騒がせな奴ね！」

友奈「ほええ……！夏凜ちゃんすつごうい！」

夏凜「……ん？友奈と園子じゃない。見てたの？」

夏凜が友奈達に気付き、機能停止しメダルの外れたメタルビートルを回収しつつ、話しかける。

園子「にぼっしーお疲れ。これで何勝何敗だっけ？」

夏凜「確か……16勝7敗くらいね」

友奈「へえ！夏凜ちゃん強いね！」

夏凜「当然よ！完成型メダロットを舐めないでよね!!」

ワームモン『完成型メダロットとはいつたい……』

chapter 4 国防仮面とロクシヨウ

????
同時刻 大橋市内・イネス付近

今、イネスの周囲は騒然としていた。

????

男性 a 「止めるんだ、シアンドッグ！くそつ、なんで命令を聞いてくれない!？」

シアンドッグ 「ギャーーーーーッス!!!」

男性 b 「イエロータートル！どうしてしまったんだよ!？」

イエロータートル 「ギャーーーーーッス!!!」

二体のメダロットが暴走しているのだ。どちらも武器をやたらめつたに撃っており、メダロットターは近付けずにいる。

このままでは町がめちやくちやになってしまふ……人々は願う「誰か、なんとかしてくれ!」と

??? 「待てい!!!」

こんな時、こんな口上で現れるのは、得てしてヒーローである。

（い） 「国を護れと人が呼ぶ……」

（ろ） 「愛を護れと叫んでる」

（は） 「……この名乗り口上、毎回するのか?」

（ろ） 「必要なことらしい……よく知らないが」

（は） 「……そうか」

男性 a 「誰だ!? 何処にいるんだ!」

男性 b 「おい、見ろ! あそこだ、駐輪場の屋根の上!」

そこにいたのは――

「憂国の戦士、国防仮面!!!」
《left》「と、その従者、レナモン」《/left》「同じく、ロクシヨウ」

国防仮面と、ヘッドシザーズのロクシヨウ、そして、ア・ブラーゲのレナモンだった!

男性 a 「国防仮面さん!」

男性 b 「助かった・・・国防仮面さんが来てくれたぞ!」

国防仮面 「さあもう大丈夫、行くわよロクシヨウ緑青、レナモン麗奈者!!」

ロクシヨウ 「合点!」

レナモン 「承知!」

駐輪場の屋根から飛び降りた二体は瞬く間に暴走メダロットを撃破。見事、暴走を止めてみせたのだった!

男性 a 「強い・・・!」

男性 b 「流石、国防仮面さんだぜ!」

国防仮面 「私は、人々が助けを求める時、出来る限り現れるでしょう・・・!」

レナモン 「それよりも美森、暴走メダロットのデータを・・・」

美森 「今の私は国防仮面よ!緑青!!」

ロクシヨウ 「今やっている」

動かなくなった暴走メダロットに、ロクシヨウが何かの機械を向けている。

ロクシヨウ 「データ取得完了・・・撤収するぞ」

国防仮面 「それでは皆さん、さらば!!!」

高笑いをしながら、国防仮面は走り去っていったのだった。

男性 a 「ありがとう・・・国防仮面!」

男性 b 「さようならー!!」

人々はお礼の言葉を叫びながら、去り行く国防仮面を見送っていた。

国防仮面に扮する東郷は今、サイバー課・特殊犯罪対策室にやって来ている。

美森「・・・ふう。姿を隠すというのも、楽じゃないわね」

ロクシヨウ「あれで隠しているつもりなのか・・・」

レナモン「そうらしい。勇者部の面々にはバレているが」

ロクシヨウ「だろうな」

美森「そこ、聞こえてるわよ」

春信「東郷さん、今回もありがとうございます」

美森「春信さん。はい、これが今回のデータです。ロクシヨウ」

ロクシヨウ「うむ。春信殿」

出迎えた春信に、ロクシヨウが持っていた機械を渡す。

春信「ありがとうございます・・・最近になって、増えてきまし

たね、メダロットの暴走事故」

美森「・・・なにか、嫌な予感がします」

春信「僕もです。だからこそ、夏凜にも調査を頼んでいます」

美森「でも、そのうちだっているんですよ？」

春信「分かっています。僕だって、彼女を疑っているわけではありません。疑っているのはむしろ・・・」

瞬間、警報が鳴り響く！

春信「何事ですか!？」

オペレーター娘E「ネットワーク上に、デジタルウェイブ反応!!ど
んどん増大してます!」

美森「なんですって!？」

ドルモン』……まあ、喜んでくれて何よりだよ。では園子』

園子「はいなく♪それポチっと」

ドルモンに促され園子が端末を操作すると、ステージ中央からカプセルがせり上がってきた。

ワームモン『あそこに……新型メダロットが……!!』

友奈「どんなのかな？楽しみだね♪」

期待に胸高鳴らせる二人の目の前で、カプセルが開く。そこには――

友奈「……あれ？なんだかどこかで見たことあるような？」

ワームモン『——これ、オメガモン？』

カプセルの中にいたのは、オメガモンにそっくりのメダロットであつた。

ドルモン『その名も“オメガナイト”。ダイパン社の看板メダロットとしてボクがデザインした最新鋭のメダロットさ！』

ワームモン『アルファモンモチーフにしなかつたのは、なんで？』

ドルモン『自分そっくりの偶像なんて、自分自身で見たくなんかないだろう？』

ワームモン『そうかなあ？』

友奈「えっと……とにかく、このオメガナイト？っていうの、私達もらっちゃって良いの？」

園子「そのために呼んだからね〜♪」

言つて園子は腕時計のような物とUSBメモリを友奈に渡した。

園子「そつちの腕時計は“メダロット”つて言つて、メダロットを仕舞つたり呼び出したり、ロボトルの時に指示を出したりする、コントローラーみたいなものなんよ〜」

友奈「へー！こつちのUSBは……もしかして、さっきの？」

ドルモン『そう、D-チップだ。それを端末に接続して、デジモンをインストールすれば、メダロットに装填可能になる』

友奈「よおし！早速試してみよう!!」

ワームモン『うん!』

chapter 6 はじめてのロボット その①

四苦八苦しながらも、ワームモンをDーチップへ移動させることができた友奈は、それをオメガナイトへとセットしようとする。

友奈「……………えつと、これどこに着ければいいの?」

園子「後ろに蓋があるでしょ?そこを開けてみて〜」

友奈「蓋……………あった!よいしょつと」

本来メダルをセットするための窪みに、Dーチップをセットすると

オメガナイト「……………!」

友奈「ワームモン、どう?」

オメガナイト「違うぞ、ユウちゃん」

友奈「ぼえ?」

オメガナイト「今の私はオメガナイト!最新鋭メダロットだ!!」

友奈「え?急にどうしたのワームモン……………」

急変したワームモンの様子に、思わず友奈はドン引きした。

オメガナイト「……………いや、せつかくだから、なりきってみようかなーって……………」

友奈「あ……………うん。なんか、ごめん」

園子「どう?メダロットの身体には慣れた?」

オメガナイト「ああ!文字通り、手足の如く使いこなしてみせるとも!!」

友奈「またなりきってる……………(苦笑)」

ドルモン「では、一戦交えてみるかい?」

オメガナイト「む?」

いつの間にやら、ドルモンもメダロットに乗っていた。ウォーグレ

イモンによく似た姿のメダロットに。

オメガナイト「そのメダロットは・・・!?」

ドルモン「そのオメガナイトと同時に開発していた二機のメダロットの内の一機さ。名前は『グレイウオーズ』という」

オメガナイト「グレイウオーズ・・・ウオーグレイモンモチーフのメダロットか!」

ドルモン「その通り。それで?ボクと戦^やってみるかい?」

オメガナイト「面白い・・・その挑戦、受けて立つ!!」

Mr. うるち「合意とみて宜しいですね!」

友奈「うわあ!出たあ!」

オメガナイト「流石ミスターうるち!ロボットの気配を察知してやって来たな?」

園子「ゆーゆ。レフェリーも来たし、やってみようよ」

友奈「うん!良いよー♪」

Mr. うるち「只今より、友奈選手のオメガナイトと園子選手のグレイウオーズの真剣ロボトを行います!ルールは簡単!相手のメダロットを機能停止にさせた方が勝利です!勝った方は相手のパーツを一個貰えます」

園子「あ、レフェリー。ちよつとルール変更なんよ」

Mr. うるち「おや?どうかしましたか?」

園子「この勝負、2VS2のチームロボトにしても良いかな?」

友奈「チームロボト?」

オメガナイト「待ってくれ、こっちは始めたばかりの初心者で、私
一体しかメダロットが無いぞ!」

???「なら俺を使えよ」

そこに、先ほど夏凜にやられたメタルビートルがやって来る。

友奈「いいの?」

メタルビートル「代わりに、俺がここから出ていくのに協力しろ。そうしたら助けてやる」

オメガナイト「……何故そんなに、ここから出ていきたがっている?」

メタルビートル「俺は誰かに縛られるなんてゴメンなんだよ!それに……毎日毎日実験ばかりで……正直退屈なんだよ!!!」

友奈「だから、脱走しようとしたの?」

メタルビートル「悪いか?」

オメガナイト「なんというか……子供みたいな理由だな」

メタルビートル「んだとお!」

友奈「まあまあ……えっと、そのちゃんもそれで良い?」

園子「うん、良いよ♪」

オメガナイト「え、そんなあつさり!」

即座にOKを出した園子に、ワームモンも思わず素に戻ってしまった。

ドルモン「園子は、こうなると分かかってて敢えてチームロボトルを提案したからね」

園子「あーん、ネタばらししないでよくドルるくん」

Mr.うるち「それでは園子選手、もう一体のメダロットを」

園子「おっと、そうだった……出ておいで」

メダロットを操作し、現れたのはメタルガルルモンモチーフのメダロット。

オメガナイト「なるほど……さっき言った新型の片割れだな?」

園子「ピンポーン♪その名も“ガルルメタル”なんよ!」

ドルモン「驚くのはまだ早いよ」

友奈「へ?」

ガルルメタル「————久しぶりだな!友奈、ワームモン」

友奈「っ!」

オメガナイト「っ!!その声……まさか、君は」

メタルビートル「？」

ガルルメタルから発せられた声に、友奈とワームモンが驚く。何故ならば、その声の主は、かつての相棒のものであったから――

友奈「―――――ブイモン、なの？」

ガルルメタル「ふふん♪」

ガルルメタルを駆るブイモンは、（友奈からは見えないが）イタズラを成功させた悪ガキのような笑みを浮かべていた。

chapter 7 はじめてのロボトル その②

友奈「ブイモン!!こっちに来てたなら、連絡してよ〜」

ガルルメタル「ははは♪ゴメンゴメン。ちよつとイロイロあってね・・・今はある人のところで厄介になってるんだ」

オメガナイツ「ある人？」

ガルルメタル「オレ達に勝てたら、教えてあげる！」

メタルビートル「だとよ・・・やれるのか？」

オメガナイツ「問題無い。一度、彼とは戦ってみたかったんだ。ユウちゃんの相棒として、果たしてどちらが強いのか・・・!」

友奈「ワームモンやる気だね〜!よおし、メタル・・・なんだっけ？」

その場の全員がズッコケる。

メタルビートル「メタルビートルだ!!」

友奈「うーん・・・長いからメタビーで!」

オメガナイツ「待った。そこはムシムシムツシーが良いよ!」

友奈「え、やだ。なんかダサイもん」

オメガナイツ「じゃあ、クヌギジュエキー」

メタビー「カツコ悪」

オメガナイツ「す・・・スイカシルシル」

園子「センスなく〜い」

オメガナイツ「・・・モグモグフヨードは? (半泣)」

友奈「ワームモン・・・あきらめてメタビーにしよう?」

オメガナイツ「・・・うん」

そんな一悶着もあったが、とにかく準備は整った。

Mr. うるち「えー、それでは・・・ロボトル、ファイトオ!!!」カーン!!

友奈「二人とも、まずは様子見——」

メタビー「先手必勝お!反応弾を食らえー!!!」

オメガナイツ「勝手に突っ走るな！」

友奈の命令を無視し、メタビーが頭部ミサイルの反応弾を放つ。反応弾は命中。爆煙が園子のメダロット達を包み込む。

オメガナイツ「クソ・・・これじゃ、相手の出方が見えない！」

メタビー「んなモン必要ねー！俺様の勝利に決まってるあ!!」

園子「ふふん♪それはどうかナク？」

友奈「っ！メタビー、避けて!!」

メタビー「へ？——ぐわっ!!」

煙から飛び出したミサイルが、メタビーに命中。脚部と右腕が破壊されてしまった。

オメガナイツ「凄い火力だ・・・！どっちの攻撃なんだ？」

友奈「ワームモン、ドミニオンを」

オメガナイツ「そうか！^{ドミニオン}領域展開!!」

オメガナイツの頭部兵装“ドミニオン”は、索敵機能に加え、味方の脚部適正をサポートする機能を持っているのだ。

オメガナイツ「見つけた！どうやらグレイウオーズを盾にして、ガルルメタルがミサイルを撃つたみたいだな」

グレイウオーズ「流石だね。そこまで見抜けるとは！」

ガルルメタル「さっきの、メタビーのミサイルはグレイウオーズの頭部兵装“グレイシールド”で防がせてもらったぜ！」

グレイウオーズ「そして、今放ったミサイルはガルルメタルの頭部兵装“メタルトマホーク”さ。通常のミサイルよりも強力なハイパーミサイルだから、威力抜群だったろう？」

友奈「すごい・・・これが、ロボット！」

初めてのロボットに、友奈はとてもワクワクしていたのだった。

chapter 8 はじめてのロボット その③

友奈「メタビー、大丈夫？まだ戦える？」

メタビー「あ・・・ああ」

友奈「よし！それじゃメタビー、狙わなくて良いから撃ちまくって!!」

メタビー「は？」

友奈「いいから、撃って撃って撃ちまくるの！」

友奈の指示にメタビーが困惑していると、オメガナイツがフォローする。

オメガナイツ「ユウちゃんには何か考えがあるんだろう。あの顔をしている時のユウちゃんは・・・凄いで」

メタビー「何が凄いかわかんねーが・・・やってみるか!!」

メタビーは意を決し、友奈の指示に従い、残った左腕マシンガンを乱射。

矢鱈滅多に飛び交う弾丸にグレイウオーズとガルルメタルは行動を制限される。

ガルルメタル「おっと・・・！流星友奈だな」

オメガナイツ「感心してる場合か？」

グレイウオーズ「いつの間に!？」

そこへ、ドミニオンによって機動力の向上していたオメガナイツが急襲。ガルルメタルに肉薄する！

オメガナイツ「貫った!!」

ガルルメタル「させ・・・ないっ!!」

オメガナイツが動くよりも先に、ガルルメタルの右腕武器が放たれる。

オメガナイツ「うわっ!?!・・・こ、これは・・・フリーズ攻撃か！」

友奈「ワームモン!?凍り付けになっちゃった・・・」

メタビー「フリーズ攻撃だ！あれを食らった奴は、別の攻撃を食らうまで動けなくなっちゃうんだ・・・」

友奈「なるほど……」

そうこう言っているうちに、グレイウオーズの攻撃がオメガナイツにクリティカルヒット! パーツが破壊されるまではいかないが、ダメージを負った。

オメガナイツ「くっ……」

友奈「大丈夫?」

オメガナイツ「今は……だが、次食らえばどうなるか……」
グレイウオーズ「会話している場合かい?」

ガルルメタル「おりやあ!」

ガルルメタルが再びハイパーミサイルを放つ。

オメガナイツ「うおおお!!」

メタビー「避けた!」

オメガナイツ「次はこつちだ! くらえ、「ガルルブラスター」!!!!」
間一髪ハイパーミサイルを避けたオメガナイツは、お返しに右腕武器ハイパービームの「ガルルブラスター」を放つ! が……

グレイウオーズ「無駄だよ」

友奈「ああ! また……」

グレイウオーズが「グレイシールド」を展開。防がれてしまった。
その隙に

ガルルメタル「がら空きだぜ!」

オメガナイツ「うわああ!」

友奈「フリーズ攻撃!」

メタビー「おいどうするんだよ!?! このままじゃ、またやられるぞ!」

友奈「——メタビー、ワームモンにミサイル攻撃!」

園子「ひよ?」

ガルルメタル「ぶふっ!」

グレイウオーズ「ええ……」

メタビー「はあ!」

突拍子もない指示に、思わず全員が友奈の方向を向いてしまう。

メタビー「お前何言ってるんだよ!?! 頭オカシインじゃねーか!」

友奈「そ……そこまで言わなかった……」

オメガナイツ「いや・・・構わない。やってくれ、メタビー！」
メタビー「マジかよ!？」

グレイウオーズ「不味いな・・・早く片付けてしまおう」

友奈「ドルモンが来た・・・!メタビー!!!」

メタビー「ああもう!どーにでもなれえ!!!」

迫り来るグレイウオーズよりも先に、メタビーがミサイルをオメガ
ナイツに向けて発射。

オメガナイツ「ぐっ・・・おおおおお!!!」

グレイウオーズ「なんとお!？」

ミサイルが命中したことによりフリーズは溶け、しかも爆発によつ
てグレイウオーズの方へへと吹き飛ばされた!

友奈「いつけー!!!ワームモン!!!」

オメガナイツ「セイヤー!」

衝突と同時に、左腕武器ビームソードの「グレイスラッシュ」をグ
レイウオーズへと叩き込む!

グレイウオーズ「——見事な、一撃だったよ」

その一撃でグレイウオーズの頭部は破壊。機能停止した。

Mr.うるち「グレイウオーズ、機能停止!!」

オメガナイツ「さあ、次はお前だ!」

ガルルメタル「いや。もうおしまいだよ」

オメガナイツ「へ?」

Mr.うるち「グレイウオーズはリーダーメダロットなので、この
試合、友奈選手の勝利い!!!」

園子「おめでとぅ〜♪ゆーゆならでできるって信じてたんよ〜」

友奈「——はえ?」

メタビー「よっしやあああああ!!!勝ったあああ!!!」

友奈「・・・何がなんだかわかんないけど、やづたー♪」
ということで、友奈の初ロボットは勝利で幕を閉じたのだった。

chapter 9 メダロット博士

ロボットが終わり、ブイモンとワームモンは友奈の端末へ。園子も、ドルモンを自身の端末に仕舞った。ちなみに、ワームモン達が使っていたメダロットはメダロット内に収納されている。

園子「いや〜最後にしてやられたんよ〜」

ブイモン『まさか、あんな方法で反撃に出るとはなあ』

ドルモン『意表をついた作戦、見事だったよ』

友奈「えへ〜♪」

メタビー「こっちは気が気じゃなかったけどな!!」

ワームモン『こんなくらしいの無茶、ゆーちゃんのパートナーだったら日常茶飯事だよ』

ブイモン『あー……うん。確かに』

メタビー「マジかよ……」

友奈「ちよつと?」

と、そこへ

???「いや〜、すごかったのう!」

拍手をしながら、白衣の老人がやって来た。

???「園子ちゃん相手に、あんな方法で勝つとは……!!年甲斐もなく、興奮してしまったわい!!」

ワームモン『あ……貴方は!?!』

友奈「え?誰?」

ブイモン『オレがしばらくお世話になってた人だよ』

友奈「そうなんだ。ブイモンがお世話になりました!」

???「うむうむ、元気な娘じやのう」

友奈からのお礼に頷く老人だったが、次の瞬間、苦悶の表情を浮かべて膝から崩れ落ちてしまう。いつの間にか接近していた園子に、脇腹をつつかれたようだ。

園子「叔父さ〜ん……ゆーゆに色目使っちゃダメなんよ〜。恐〜い恐〜い国防仮面さんに、吊るされちゃうんよ〜」

???「え、恐……」

友奈「あれ、そのちゃんの知り合い？」

園子「うん。そうなんよ」

園子が説明しようとした瞬間、ワームモンが口を挟んだ。

ワームモン『木葉原アトム氏きばはら!!!ダイパン社の玩具開発部門主任にして、メダロットの産みの親!それ故世間では“メダロット博士”の名で呼ばれる事が多いお方だよ!!!』

ブイモン『どうした急に』

ワームモン『一年程前、本州各地で発見された“六角貨幣石”に高度な処理能力がある事を発見し、それを組み込んだロボット——つまり、メダロットを思い付いたそうだよ』

友奈「ろっかくかへいせき?」

メタビー「オレ達のメダルのことだな。2年前に発見された時は、そう呼ばれてたんだと」

ワームモン『他にも、ナノマシンを利用した自動修復機能“スラフシステム”や、メダロットの転送機能なんかも開発した凄い方なんだ!』

友奈「へー……」

園子「実はそれ、叔父さんの友達がほとんど造ったものなんだけどねー」

友奈「え」

アトム博士「おいおい……(汗)それを言っちゃあいかんよ、園子くん」

友奈「……盗作?」

アトム博士「違あくぅう!!発表の段階になって、あいつがプロジェクトから抜けたから、仕方なくわしの名前だけで公表しただけじゃもん!!」

園子「いい年こいて“もん”とか言わないでよ。気持ち悪い」

アトム博士「——今の一言が一番傷ついた」

ワームモン『サインもらって良いですか!?!』

友奈「このタイミングで!?!」

chapter 10 メダロット暴走

友奈の手帳にメダロット博士のサインを貰ったワームモンは、とても上機嫌だった。

ワームモン『えへえへえへ♪これはもう家宝にするべきだと思うな
〜♪』

友奈「そっかー・・・」

アトム博士「ワームモンくん、と言ったかね？メダロット、好きかい？」

ワームモン『はい！大好きです!!!』

アトム博士「うむ、良い返事だ。もし良ければ、今開発中の新型メダロットのテストの様子でも見るかい？」

ワームモン『良いんですか!?やったあああああ!!!』

友奈「でも、お邪魔じゃないですか？」

アトム博士「なあに、かえって宣伝にもなる。君達に来てくれた方が、こっちとしてはお得なのじゃよ。どうかね？」

ブイモン『博士もこう言ってるし、見学してったら?』

ワームモン『行こうよ!ゆうちゃくくん』

友奈「・・・それじゃ、行こっか」

ワームモン『わーい!!』

友奈「ごめんねメタビー。もうちょっとだけ、付き合ってくれる?」
メタビー「ったく、仕方ねーな」

園子「それじゃ、私は着替えてくるんよ。叔父さん、ゆうゆのこ
とよろしく」

アトム博士「うむ」

園子と別れ、友奈達は別のフロアへと向かった。

友奈「そういえば、そのちゃんが博士のこと、叔父さんって・・・」
アトム博士「ん?ああ。わし、こう見えて園子くんの親戚でな」

ワームモン『そうだったんですか!!』

ブイモン『らしいな。オレも最初聞いたときは驚いたよ』

友奈「ほへー・・・」

アトム博士「よーし、着いたぞい」

到着した実験場では、黒いメダロットと天使のようなメダロットが、盾を持ったメダロット二体とロボットルしていた。

ワームモン『あの盾持ちはナイトアーマー。防御に特化した騎士型メダロットだね』

友奈「へえ・・・噂の新型じゃないってこと?」

ワームモン『たぶん、それはこっちの二体じゃないかな?見たことないメダロットだし』

アトム博士「流石じやの〜。黒い方は悪魔型メダロット、ブラックメイ。もう一体は天使型メダロット、ヒールエンジェルじゃ!」

博士が説明していると、ブラックメイがナイトアーマーを一撃で機能停止させてみせた!

ワームモン『凄い破壊力だ・・・!』

友奈「そうなの?」

メタビー「ナイトアーマーの装甲は、オレですら手こずるレベルの堅さでな。それを一撃・・・相手にしたくねーな」

友奈「なるほど・・・!」

しかし威力が有り過ぎるのか、ブラックメイの腕は損傷していた。そこへヒールエンジェルがやってきて、ブラックメイに何かした。

友奈「あれは?」

アトム博士「あれこそ、ヒールエンジェルの能力じゃよ」

メタビー「・・・あいつ、パーツを直すことができるのか!」

ワームモン『え!?そんなパーツ、聞いたことないよ!』

アトム博士「じゃから、新型なのじゃよ♪」

なんて話し合っている、その時だった。

研究員 a 「なんだ・・・!?おい、どうした!」

研究員 b 「うわあ!!!」

ブラックメイユ 「ギャーギャーギャー!!!」

ヒールエンジェル 「ギャーギャーギャー!!!」

突如として、新型メダロット二体が命令を無視して暴れ始めたのだった!

アトム博士 「何事か!？」

研究員 a 「わかりません……突然暴れ始めて……」

友奈 「とにかく止めないと……!」

ワームモン 『任せて!』

メタビー 「仕方ねーな!」

chapter 11 もう一人の「博士」

オメガナイツ「ゼヤアア!!」

オメガナイツに乗ったブイモンが、ブラックメールにグレイスラツシユで攻撃。見事、脚部を破壊した。が、しかし――

ヒールエンジェル「……!」

ブラックメール「……」

友奈「そんな……壊したパーツが……」

メタビー「ダメージを回復するだけじゃねーってことか……」

ワームモン『うううう……ぼくだったら一発で頭を破壊しておし

まいなのに!!』

オメガナイツ「うるせー! いいからオレに任せろつての!!」

言うや否や、オメガナイツが突撃する。

メタビー「サポートするこつちの身にもなれつてんだよ……!」

メタビーが援護射撃を行い、ブラックメールの動きを制限する。のだが、オメガナイツは真つ正面からブラックメールに立ち向かう。

メタビー「おい友奈! アイツ突撃しか能が無いのか!」

ワームモン『キミに言われたくないと思うよ……?』

メタビー「んだとお!」

友奈「大丈夫。ブイモンを信じて」

メタビー「はあ? お前、そればっかだな……」

ワームモン『それがゆーちゃんの良いところだからね』

メタビー「良いのかあ?」

そうこうしている内に、互いに互いの攻撃圏内に迄、接近し……オメガナイツは、ブラックメールを飛び越えて、その後ろに控えているヒールエンジェルへと攻撃を仕掛けた!! その一撃で、ヒールエンジェルは要たる両腕を破壊され、回復を行えなくなった。

メタビー「なっ……!?!」

アトム博士「おお……!?! 相手を足場に!」

ワームモン『なるほど、そつちが狙いかあ』

友奈「ねっ♪言つたでしょ?」

オメガナイツ「どーだあ!!!」

自信満々にガッツポーズをとるブイモン（onオメガナイツ）。

と、その時。実験場のスピーカーから、謎の男性の声流れだした！

??? 『ふふふ．．．流石、キバハラに選ばれただけのことはあるな』
オメガナイツ「誰だ!？」

ワームモン『いったい何処から．．．?』

アトム博士「この声——お前の仕業なのか．．．!」

??? 『そうだとも。久しぶりだな．．．キバハラ』

アトム博士「——ドブロク」

ドブロク『ドブロク言うな!! 私は陸くが 十蔵じゅうぞうだと、何べん言わせる

!!』

アトム博士「だってなあ．．．」

先程までの緊迫した空気は何処へやら．．．。

友奈「えつと．．．知り合いなんですか?」

アトム博士「陸 十蔵。通称ドブロク“十二六”．．．わしと共に、メ

ダロットを作り上げた男じゃ．．．!」

chapter 12 “獣王”、起動

ドブロクと名乗る『ドブロクでは無いっ！十蔵だ!!』——十蔵と名乗るこの男。彼は自らが、メダロット暴走事件の主犯だと語る。ドブロク十蔵『そうだ！この私こそが、昨今起きているメダロット暴走事件の——おいなんだそこの取り消し線は。私は十蔵だと
言っているだろうが!!』

ワームモン『陸(六)十蔵(十三)なのに、なんで十二六?』

アトム博士「無理して濁酒呑んでケミカルハザード起こしたから」
メタビー「マジかよサイテーだな」

ドブロク『ええい！私の過去をバラすんじゃない!!!』

等と話している間に、オメガナイツ(オンブイモン)が操られていたブラックメールとヒールエンジェルを倒していた。

オメガナイツ「ふいー・・・大人しくしたぜ！」

友奈「ありがとう、ブイモン！」

ドブロク『チツ・・・なかなかやるではないか』

友奈「どうしてこんな事をするの!?この子達がかわいそうだよ！」

友奈の問いかけに、十蔵もコントを止めて答える。

十蔵『フン・・・！私はただ、メダルに掛けられたリミッターを解除してやっただけだ』

メタビー「リミッター？何の話だ？」

友奈「・・・博士？」

沈黙するアトム博士に代わり、ワームモンが答える。

ワームモン『たぶんだけど・・・メダロット三ヶ条』のことだ
と思うよ』

友奈「メダロット三ヶ条？」

ワームモン『

・第一条 わざと人間を傷つけてはならない

・第二条 人間に危険が降りかかるのを見過ごしてはならない

・第三条 第1条と第2条を破らない範囲で己を守り、他のメダ
ロットに致命傷を与えてはならない

これら三つのルールが、メダロットには課せられているんだ。いくら玩具だからって、使い方を間違えれば人を傷つけてしまうからね』アトム博士「——そうじゃ。彼の言う通り、市販のメダルには『メダロット三ヶ条』を遵守するように、リミッターが掛けられている……勿論それは、人々の安全、そして何より、メダロットと人間が共存していけるようにするためのものじゃ」

十蔵『キバハラ……私はかつて言ったはずだ。「そんなものは人の傲慢に過ぎぬ」と。メダロットの自由意志を阻害し、人が御しやすくする為の三ヶ条など必要無い、とな』

アトム博士「わしの考えは変わらん！今はまだ、その時ではない!!」

十蔵『強情だな……ならば此方も、強行手段を取るまで!』

瞬間、ビル内の至るところから無数の黒いコードが壁や天井を突き破って出現し出した!

オメガナイト「なんだ……!?何が起きた!」

友奈「きゃあ!」

メタビー「う……うわああああ!」

まるで、ビルを作り替えるかのように、無数のコードが伸び、絡まっていく。

ワームモン『まずいよ……分断されちゃう!』

友奈「ブイモ〜ン!メタビー!」

オメガナイト「くっ……友奈あ!」

離ればなれにされゆく最中、十蔵の声が魔改造されたビルに響き渡る。

十蔵『さあ、始めよう……我が子、ビーストマスターよ!』

その声に応じるように、遠くから、獣の雄叫びのような音が聞こえたのだった。

chapter 13 手掛かりは “迷子のお知らせ

“

春信「デジタルウェイブの発生源、まだ特定できませんか!？」

オペレーター娘E「すみません・・・範囲も規模も大きく、特定にはまだ、時間が・・・」

美森「——状況は最悪、ですね」

春信「ええ・・・何もかも、後手に回ってしまっています」

あれから、デジモン発生 電腦障害とメダロットの暴走が重なって頻発するようになり、サイバー課・特殊犯罪対策室の面々は対応に追われている。

電腦障害の方は、ステイファイルモンとサクヤモンが陣頭指揮を執り、水際でどうにか耐えている。しかし、暴走メダロットについては難しい。

たかだか玩具だと侮るなかれ。ものにもよるが、メダロットの武装は岩をも砕くことができるのだ。

春信「安芸さんに頼んで、調査隊の方々に対処してもらっています
が・・・」

美森「元凶を断たねば、いずれ此方が押しきられてしまいます」

春信「その通りです。だからこそ、デジタルウェイブの発生源を見つけなくてはならないんですが・・・」

そこに、ステイファイルモンから連絡が入る。

ステイファイルモン『春信!ちよつと良いか?』

春信「どうかしたのかい?」

ステイファイルモン『いや、さ・・・とりあえず、これ見てくれ』
春信「?」

ステイファイルモンから送られてきたのは、今ネットワーク内に出現しているデジモンに関するデータだった。

春信「・・・ふむ、僕達が保有しているデータには、このデジモンのデータが無いね。新種のデジモンかな?」

クラモンに似た外見の、緑色のデジモン。

それが今、ネットワーク内に出現しているデジモンの正体らしい。
春信「・・・それで、この新種のデジモンがどうしたんだい？」
サクヤモン『変わってくれ——すまない。このデジモン、どうも奇妙なんだ』

春信「奇妙・・・？」

美森「どういうこと？」

サクヤモン『こいつら、何もしていないんだ。それどころか、何処か別の場所に行きたがっているように見える——いや、多分戻りたがっているんだ』

春信「・・・えっと、どういうことですか？」

美森「つまり、この新種のデジモンは、何処か別な場所から溢れてきてしまっている、ということ？」

サクヤモン『私には、そう見える』

ステイファイルモン『正直、僕にはよくわかんないけどな・・・それと、メツセージが届いてたから確認したんだけど・・・なあこれ、どういう意味なんだ？』

春信「メツセージ・・・？」

ステイファイルモン『差出人は、〃乃木園子〃だっけ』

美森「そのつちから!? 見せてちょうだい！」

ステイファイルモン『へ？ お・・・おう』

少々食い気味に要求してきた東郷に、若干引きつつも、ステイファイルモンは園子からのメツセージを見せる。

乃木園子です

乃木園子です

乃木園子です

美森「これは・・・! そのつちが迷子になった時の合図!!」

ステイファイルモン『いやなんでさ。今あの子ダイパン社にいるんじゃないの?!』

ステイファイルモンが突っ込みを入れるが、春信は冷静に思考を巡ら

せる。

春信「——もしや、ダイパン社で何かが起きたのでは？」
美森「私も同じ意見です。きつと、そのうちの身に何かがあったのだと思います」

サクヤモン『成る程……ならばそのダイパン社に行ってみるか』
春信「そうですね……東郷さん、お願いできますか？」

美森「任せてください！」

サクヤモン『私はこのまま、ネットワーク内から向かう。向こうで落ち合おう』

美森「ええ」

そうして東郷は、国防仮面の衣装を纏い、ダイパン社へと向かうのだった。

ステイフィルモン『いや、なんでその服着て行ったの!?!』

春信「——まあ、良いんじゃないかな。別に」

ステイフィルモン『春信が諦めてる!?!』

chapter 14 流されて・・・ここはどこ？

オメガナイト「いてて・・・ここは、どこだ？」

気が付いた時には、オメガナイトのブイモンは一人きりだった。

ビル内は完全に様子が変わっており、今、自分がどの辺りに居るのかすらわからない状態だ。

オメガナイト「えーつと、こういう時は・・・ドミニオン！」
頭部パーツによる周辺探索を行ってみるが、四方八方に動くコードを捉えてしまい、使い物にならない。

オメガナイト「うーん。こりや手詰まりだな・・・どうしよう？」
と、その時、コードから何かが出現し始める。

ポコポコと泡のように沸き立った。それは、同時にネットワーク内[・]に出現した緑色のデジモン[・]に変化したのだ[・]だった。

オメガナイト「こいつ・・・アルゴモンじゃないか!!」

ブイモンにアルゴモンと呼ばれたそのデジモンは、今も尚増殖し続けている。

オメガナイト「まだ幼年期か・・・なら、このままでも！」
攻撃を仕掛けようとした、その時だった。

???「おい！うまく避けるよー!!」

オメガナイト「へ？・・・つて、うおっ!!」

背後から声が出たと同時に、複数のミサイルが飛んできて、アルゴモンを一掃した！咄嗟にしゃがまなければブイモンにも命中していただろう。

オメガナイト「あつぶねーなあ・・・」

???「でもおかげで助かったろ？」

オメガナイト「・・・メタビーか。無事でなによりだよ」

得意げな様子のメタビーに苦笑しつつ、お互いの状況を確認し合う。

メタビー「落ちた後、さっきのアイツに襲われてさー。もしかしたら他の連中も、って思ってたんだよ」

オメガナイト「正しい判断だったな。アルゴモンは、今のオレ達に

とって、天敵とも言える存在だから……」

メタビー「天敵？ どういうことなんだ？ つーかお前、あのアルゴモンとかいう奴のこと、知ってるのか？」

メタビーからの質問に、ブイモンは少し沈黙し……

オメガナイツ「少し前、デジタルワールドに未知のデジタルゲートが開かれた。そこから出てきたデジモンが、あのアルゴモンだったんだ」

メタビー「未知？ ゲート？」

オメガナイツ「オレは、アルゴモンの出所を探るためにゲートを通った。で、たどり着いた場所が——」

メタビー「ジイさんとこだった……と。なら、アルゴモンはジイさんのデジモンってことになるな」

オメガナイツ「ところがぎつちよん。話はそう簡単じゃなくてさー……オレがたどり着いた場所、正確にはアトム博士の家にいたメダロットの中だったんだ」

メタビー「は？ メダロットの……中あ!？」

メタビーのすつとんきような声を聞きつつ、ブイモンは自らの知っていることを語り始めた。

chapter 15 アルゴモン

メタビー「メダロットの中って……いったいどういう事だつてばよ!？」

オメガナイト「オレも、正直よくわからなかった。まさか、メダロットが独自のネットワーククラウドに繋がっているなんて事……想像できるか？」

メタビー「……なんだと?独自のネットワーク?そんなもん、どこにあるってんだよ」

オメガナイト「お前達本人——人?まあいいや。お前達には認識出来ない、所謂、〃無意識の領域〃にあるらしい。詳しいことは、オレにもわからないんだけどさ」

とにかく、と一旦区切りブイモンは話を続ける。

オメガナイト「このアルゴモンは、どうやってるのかは分からんが、そのネットワーククラウドからメダロット達の内部に入り込み、リミッターを破壊しているようなんだ」

メタビー「そんなこと……できるのか?」

オメガナイト「可能不可能の話で言うなら……可能だ。実際オレは、あるメダロットの中に漂着したワケだしな」

メタビー「そーいやそうだった——ん?待てよ……そのメダロットはどうなったんだ?暴走したのか?」

オメガナイト「ああ、それは——」
と、その時。再びアルゴモンが出現し、メタビー達に襲い掛かってきた!

オメガナイト「チツ!話は後にしよう!」

メタビー「つたく……落ち着いて話も聞けないぜ!!」

悪態を吐きながらも、アルゴモンを迎撃すべく、戦闘態勢をとる。

オメガナイト「……友奈達は、大丈夫だろうか?」

メタビー「そーいや忘れてた。早いとこ、合流した方が良さそうだ」

オメガナイト「忘れてたのかよ!？」

????????????????

あれから、友奈は一人ビル内をさ迷い歩いていた。

友奈「うーん?????ここ、何処なんだろう？」

ワームモン『うむむむ……ネットワーク内も、なんだか大変なことになってるみたい』

友奈「さつき、十蔵博士が言ってた『びーすとなんちゃら』ってのが、原因かな」

ワームモン『多分ね……でも、ビーストマスターなんて、聞いたことが無いよ』

友奈「とにかく、ブイモン達と早く合流しないと！そのちゃんやアトム博士のことも心配だし」

ワームモン『そうだね——っ!? ゆーちゃん伏せて!』

突如として起きた爆発。ワームモンの警告が無ければ、友奈も巻き込まれていただろう。

友奈「な……何く〜?」
「——開いたぞ」

「ええ。これの中に——友奈ちゃん!」
友奈「え? ……あ、東郷さん!」

爆発によって空けられた壁の大穴の向こう。そこに、国防仮面の衣装を纏った東郷がいた。

友奈「東郷さん！助けに来てくれたんだね!!」
美森「ええそうよ!! 無事で良かった……」

ロクシヨウ「いや、彼女が居ることすら知らなかったらう?」
美森「おだまり」

ロクシヨウ「理不尽だ……」
ワームモン『ふおおお……KWG型メダロット、ヘッドシザー

スだあ……!!』
カオスな再会を果たした友奈と東郷だったが、その邪魔をするかの

如く、此方にもアルゴモンの群れが現れた。

友奈「わぁ!?!何これー!」

ロクシヨウ「・・・こ奴等もしや、ブイモン殿の言っていたアルゴモンとやらか?」

美森「知ってるの?ロクシヨウ」

ワームモン『話は後!来るよ!!』

美森「ロクシヨウ!!」

ロクシヨウ「承知・・・!」

chapter 16 合流

ロクシヨウの活躍によって、襲撃してきたアルゴモンの群れは蹴散らされた。

友奈「東郷さんのメダロット、スツゴク強いんだね！」

美森「うふふ♪ロクシヨウは特別らしいから」

ワームモン『特別って?』

美森「そのつちの話だと、希少金貨と呼ばれる、特別な金貨なのでそうよ」

ワームモン『噂に名高いレアメダルってやつか・・・』

友奈「???」

例によって例の如くな友奈に、ワームモンが説明する。

ワームモン『えつとね、メダロットのメダルの中には、他のモノとは比べ物にならないくらい強いメダルがあるって言われてるんだ』

友奈「それが、レアメダル?」

ワームモン『都市伝説だと思ってたけど、あの強さを見るとほんとなのかもって、信じちやいそう』

友奈「ふーん」

ワームモン『・・・ゆーちゃん、興味ない?』

友奈「だって、よくわかんないし・・・」

ロクシヨウ「・・・む?」

美森「何かあった?」

何かに気付いたロクシヨウが身構える。

ロクシヨウ「二機・・・いや、メダロットが二機、此方に近付いてくる」

友奈「メダロットが・・・?」

ロクシヨウ「接触まで・・・三・・・二・・・一・・・」

今!と言おうとした瞬間、天井が破壊されそこからオメガナイツが落下してきた!

オメガナイツ「せやああああ!!!」

ロクシヨウ「なんと・・・!?!」

辛うじてそれを回避したロクシヨウは、反転し攻撃。オメガナイツはそれを受け止め――

友奈「ストツプ！ストゥゥゥゥツプ!!」

オメガナイツ「……あれ？友奈じゃん」

メタビー「あ？なんだよ……ビビらせやがって。お前も無事だったんだな」

友奈「メタビーも！良かったあ」

美森「あら、もしかして友奈ちゃんの？」

友奈「うん、メタビーだよ」

メタビー「よろしくな！」

ロクシヨウ「メタビー殿か……某はロクシヨウ。そちらは？」

オメガナイツ「ロクシヨウ？博士んこの、クワガタメダルの？」

ロクシヨウ「……それを知っている？まさか、ブイモン殿か？」

オメガナイツ「久しぶりだなあ！」

ロクシヨウ「息災で何より！」

オメガナイツとロクシヨウが抱き合う。

友奈「え？ブイモン、知り合いなの？」

美森「私も初耳だわ……」

オメガナイツ「オレがこっちに来た時に、たどり着いたのがロクシヨウの中だったんだ」

ロクシヨウ「あの時は珍妙な感覚であった……」

メタビー「なるほどなー。コイツん中に……」

友奈「？」

オメガナイツ「……順を追って話した方が良いかな」

ということ、情報の共有も兼ねて、これまで経緯を話し合うことになった。

chapter 17 目的

友奈はメンテナンスも兼ねて、オメガナイツとメタビーをメダロツチに戻しつつ、端末に戻したブイモンの話を聞いている。

美森「……つまり、この惨状を造り出したのは、その陸十蔵という人物なのね？」

ブイモン『と、思っている。その目的は——』

友奈「メダロツト達の、解放」

美森「……難しい問題、ね」

友奈「あれ？じゃあ、あのアルゴモンは何？」

メタビー『そもそも、あいつらどうやって現実世界に出てきてんだ？』

友奈「うわあ!?!びっくりした……メタビー、そんな状態でも喋れるんだ」

メタビー『お前もうちよいメダロツトに興味持てよ……』

メダロツチからしたメタビーの声に、友奈が驚いている間に、ブイモンが話す。

ブイモン『たぶん、メダロツトを操る為に必要なんだと思う。オレが、ロクシヨウの中に漂着した時みたいに』

ロクシヨウ『うむ。人間で例えるならば、憑依されたような感覚だったな』

ブイモン『あの時は、半分事故みたいな感じだったし、ロクシヨウの意識を尊重してたけど、あのアルゴモン達は違う。メダロツトを乗っ取って好き勝手に暴れているように見える』

ワームモン『——でも、それでリミッターを破壊できるの？』

ロクシヨウ『博士曰く、リミッター機能そのもののロックは簡単に外せるようになってるらしい。それこそ、メダロツトの自由意志を尊重する為に』

美森「つまり……アルゴモンを使って暴れさせれば、自ずと制限も解除される、ということ？」

ブイモン『狙いとしては、そんな感じじゃないかな?』

ワームモン『回りくどいことしてるなあ……』

と、そこにまた新たなアルゴモン達が湧き出て来たので、メタビーとロクシヨウが相手をする。

ワームモン『で、あのアルゴモンは?どういう原理でリアライズしてるの?』

ブイモン『サイプラシウム合金って、知っているか?』

ワームモン『メダロットのパーツやティンペットに使われてる素材だよ。ナノマシンを沢山含んだ特殊合金』

ブイモン『そいつをデジモンが取り込むと、どういう理屈かリアライズ出来るんだよ』

友奈「え!?! そうなの!?!」

ブイモン『とは言っても、メダロット一体分でリアライズできるのは、幼年期デジモン一体分くらいだからなあ……』

美森「だけど、数を揃えれば……」

友奈「と言うか、どうやって取り込むの? デジモンは電脳世界にしかないのに——」

ブイモン『さつき言ったじゃないか。デジモンはメダロットを乗っ取れるんだぜ?』

友奈「——え!?! それで取り込めるの!?!」

ブイモン『アトム博士の研究によると、そうらしい。尤も、この研究に関しては、博士だけのものではないそうだけど』

友奈「十蔵博士と、共同研究してたんだっけ……」

メタビー「話、終わったか?」

ロクシヨウ「此方は片付いた。進もう」

美森「……とにかく今は進みましょう。真実はきつと、この先よ」

chapter 18 メダフォース―①

そうして、時折現れるアルゴモンを処理しつつ、友奈達は遂に屋上までたどり着いた。

そこには、球体型の浮遊物に乗る老人と、奇つ怪な形状のメダロットが待ち構えていた。陸十蔵とビーストマスターである。

十蔵「ふん。ここまで来られるとはな・・・流石、神々に選ばれし勇者達か」

美森「何故、こんな事を」

十蔵「決まっておる。メダロット達を解放するためだ」

メタビー「んなもん、こっちは望んじやいねーよ」

ロクショウ「そういう事だ・・・これ以上の狼藉、見過ごす訳には行かぬ！」

メタビーとロクショウがビーストマスターに対峙する。

十蔵「ならば仕方あるまい・・・やれ！ビーストマスター!!」

獣のような咆哮と共に、ビーストマスターが左腕武装「デスビーム」を放つ。

オメガナイトの物とは比べ物にならない程の、圧倒的熱量を誇るハイパービームがメタビー達目掛けて撃ち込まれる。

友奈「メタビー！」

メタビー「ぬわああああ!!」

決死の覚悟で回避し、どうにか直撃は免れた。

メタビー「当たったら確実に死ぬやつだこれ・・・」

ワームモン『ゆうちゃん！ぼくも行くよ！』

ブイモン『いやー！ここはオレが！』

ワームモン『ぼく！』

ブイモン『オレ！』

ワームモン『ぼく!!』

ブイモン『オレ!!』

友奈「じゃあ二人で行こう！」

ブイ&ワーム；ワーム『え？』

友奈が取り出したるは、専用デジヴァイスD-3。端末の中でパイロドラモンに進化させ、オメガナイツに搭載したのだった。

オメガナイツ「荒業が過ぎる・・・！」

友奈「頑張つて、パイロドラモン!!」

十蔵「我が子ビーストマスターを舐めるでない!!」

ビーストマスターの右腕武装「デスボム」が放たれ、周囲に爆弾が撒き散らされる!

ロクショウ「くっ・・・!これでは近付けぬ」

メタビー「だったら撃てばいいだろ!!」

オメガナイツ「そりやそうだ!」

メタビーのミサイルとオメガナイツのハイパービームが同時に炸裂!しかし――

十蔵「はーはっはっは!無駄だ!!」

二体の攻撃は、ビーストマスターの直前で、何かに遮られ届かなかった。

メタビー「なんだあ?」

オメガナイツ「バリアだど!?そんなパーツ、存在する訳・・・」

ロクショウ「――メダフォースか」

十蔵「左様。メダロット達だけが持つ、特別な力!アルゴモン達を介して他のメダロット達から集めているのだ。この力は、戦いの最中でのみ発現するからな」

美森「アルゴモンを使って暴れさせていたのは、それが理由・・・!」

十蔵「そうして集めたパワーで、私は、メダロット達の王国を創る!!かつて存在したという“古代メダロ人”達の国のように!!」

友奈「メダロ人・・・?」

十蔵「その邪魔をする者共は、今ここで排除する!!ビーストマスター!!!」

再びビーストマスターが吠え、頭部武装「デスブラスト」をメタビーに放つ。

メタビー「しま――うわあ!!!」

今度は避けること叶わず、強力なプレス攻撃がメタビーに直撃！
友奈「メタビーーーーーー!!!」

chapter 18 メダフォース―②

「デスブラスト」の直撃を受けたメタビーは、瀕死の重症を負った。

友奈「メタビー!」

メタビー「くそ……なんつー威力だ……」

辛うじて動いているが、戦闘はもう無理だろう。

友奈「そこで休んでて」

ロクシヨウ「……破壊力もそうだが、それ以上にあのバリアをなんとかせねば」

決意を瞳に宿し、ロクシヨウは東郷を見る。

ロクシヨウ「あれを使う。メダフォースには、メダフォースだ」

美森「……それしか、方法は無さそうね」

オメガナイト「何か手立てがあるのか?」

ロクシヨウ「ああ、ブイモン殿……なのか? 貴殿には時間稼ぎをしてもらいたい」

オメガナイト「今の俺は、パイルドラモンだよ。アイツの注意を引き付けておけば良いんだな? 任せろ!!」

まずは牽制、と言わんばかりに右腕ハイパービームで攻撃を仕掛ける。が、やはりバリアに阻まれ当たらない。

オメガナイト「だったら……!」

急速接近し、左腕ビームソードで斬り付ける。が、これも駄目。

十蔵「良いのか? そんなに近付いて……」

オメガナイト「!?!」

突如として伸びたビーストマスターの脚部のコードが、オメガナイトを捕らえた! これでは身動きが取れない。

十蔵「終わりだな」

オメガナイト「いいや、これでいいのさ」

十蔵「何?」

捕らえたオメガナイトは、しかし、ビーストマスターの両腕を掴み、明後日の方角へ向ける。これでロクシヨウが狙われる心配はなく

なつた!

十蔵「時間稼ぎのつもりか!？」

オメガ「最初っからそのつもりだよ!! ロクシヨウ! 俺ごとやれエーーーー!!!」

心の中で「一度言ってみたかったんだよなあ♪」とか思いつつ、ロクシヨウへ叫ぶ。対するロクシヨウは――

ロクシヨウ「……友奈殿?」

友奈「構わない、やっちゃえっ!!」

ロクシヨウ「御意っ!」

瞬間、ロクシヨウの背中から透明な虫の羽のようなオーラが現れる。

ロクシヨウ「メダフォース……発動!」

唐竹割り

背中のおーラを纏い、斬撃が飛ぶ。

一直線にビーストマスターへ向かい、やはりこれまで同様バリアに阻まれてしまう。

が、それは一瞬だけだった。

ロクシヨウが放った斬撃は、バリアを破壊。とうとうビーストマスターに直撃したのだつた!!

オメガナイツ「うおおおあああああ!?!?」

友奈「パイルドラモン!」

爆発の衝撃で吹っ飛んだオメガナイツを、友奈が受け止める。

美森「……倒した?」

オメガナイツ「――まだだ!？」

爆煙の向こうからプレス攻撃が飛んできて、ロクシヨウを機能停止に追いやった!

ロクショウ「がつ．．．!？」

美森「ロクショウ!？」

友奈「嘘．．．まだ動いてる!？」

煙が晴れた時、そこにいたビーストマスターはボロボロだった。両腕は完全に砕け散っており、頭部は半壊していた。

しかしそれでも、ビーストマスターは動いていた。

オメガナイト「なんて奴．．．!？」

友奈「そんな．．．ここまでなの?」

誰もが諦めかけていた。

メタビー「ふぎけんな．．．!」

ただ「ひとり」を除いて。

友奈「メタビー?」

メタビー「ロボットはなあ．．．諦めた方が負けなんだよ!!」

十蔵「だがそんな身体では、満足に戦えまい?」

メタビー「うっせえ!!!」

メタビーの叫びに呼応するように、ビーストマスターが再びプレス攻撃を仕掛けようとする。

メタビー「意地があんだよ．．．!」

瞬間、メタビーの背中にもロクショウから出た虫の羽のようなオーラが現れる!

メタビー「メダロットにもなああああああああ
!!!!!!」

同時に放たれる、プレス攻撃とメダフォース。

ぶつかり合い、鬨ぎ合い、しかし、勝利したのは――

メタビー「うおおおおおりやああああああああ
!!!!!!」

メタビーのメダフォースに呑まれ、悲鳴のような雄叫びを上げつ
つ、ビーストマスターはついに機能停止に陥ったのだった。

chapter 19 究極のアルゴモン

メタビーの放ったメダフォースによって、ビーストマスターは遂に機能停止した。

十蔵「そんなバカな．．．!?こんな事が．．．」

と、そこにアトム博士を背負って園子がやって来た。

アトム「なんとか間に合ったか．．．!?」

園子「ひい——ひい——叔父さん、ちよつとは運動して．．．」

アトム「ぎっくり腰がひどくなるからやだ」

友奈「あ!そのちゃんと博士!!」

美森「無事だったのね。良かったわ．．．」

アトム「．．．ドブ洛克」

アトム博士が十蔵の下に近寄る。

十蔵「私の夢が．．．ロボットの国を創る夢が．．．」

アトム「その夢は、もっと別の方法で叶えるべきだと．．．前に

も言ったはずだぞ、十蔵」

十蔵「ふん。メダロット達を縛り付けておきながら言う事か!．．．

だが、そうだな．．．」

ボロボロになったビーストマスターを見つつ、十蔵は語る。

十蔵「こんな、無理矢理に操る真似をせずとも、できたはずだな．．．

それこそ、彼らの自由意思で」

アトム「そうだな．．．」

と、その時だった!

???「ソレハ困ル那。我方復活ヲ遂ゲル似ハ、めだろつと達乃力ガ必要不可欠那乃ダ」

謎の声が、ビーストマスターの残骸から聞こえてきたのだった！

美森「何奴！」

???「シカシ那ガラ、ココマデ乃働キハ大儀デアツタ。我が復活ヲ遂
ゲル似ハ十分ダロウ」

十蔵「なんだと……!? どういう事だ！メダフォースを集め、そ
れを使ってメダロット達のリミッターを外す計画ではなかったの
か……!？」

???「ア、ソレハ嘘ダ。残念ダツタ那！」

高笑いと共に、ビーストマスターの残骸がその形状を変えていく。
どんどん大きくなっていき、遂にビルに亀裂が入り始めた。

十蔵「そんな……」

園子「ビルが崩れそう……早く逃げなくちゃ！」

友奈「十蔵さんも！早く!!」

十蔵「——私、は」

しかし、やんぬるかな。とうとうビルが堪えきれず、友奈達は再び
落下してしまうのだった。

友奈「きゃあああ!？」

美森「友奈ちやあああああん！」

十蔵「——!」

が、今回は十蔵が全員を救い上げ、どうにか倒壊するビルから脱出
できた。

アトム「ほほう、やるではないか」

十蔵「——ふん。礼はいらん」

十蔵の乗り物が安全な場所に着地した時には、遂に真の黒幕がその
姿を衆目の下に晒していた。

アルゴモン究極体「我は『アルゴモン』。藍原繁が産み出したる、新たな生命体の頂点なり!!!」

そうして、高々と笑い声を上げるのだった。

chapter 20 藍原の遺産（パンドラボックス）

ビーストマスターを核に、復活を遂げた（と語る）アルゴモン。

アトム「おい、ドブ洛克！あれは何だ!? いったいお前は何をした!!」

園子「叔父さん落ち着いて」

十蔵「———— 藍原繁は、知っているな？」

その名を聞いた瞬間、空気が凍りついた。

友奈「———— はい」

美森「正直、思い出したくない名前ね……」

十蔵「あのデジモンは、奴がかつて産み出し、自身の手に負えないからと、とある場所に封じられていた人造デジモンだ」

美森「人造デジモン……デジ・バーテックスのようなものかしら」

園子「ごみ処理くらい、きちんとやっておいて欲しかったんよ」

アトム「辛辣じゃのー……」

十蔵「私は、私の夢の為、文献を手繰りあのデジモンとそれ用に調整されたメダロットを発掘した」

友奈「え？メダロットって博士達が造ったものじゃ……？」

アトム「そうじゃ。が、その元となったロボットを造ったのは藍原なんじゃよ。わしの家にそれに関する資料があったのでな、参考にさせてもらった」

美森「そうだったんですか……」

アトム「あの男は元々、メダルを『デジモンをリアライズさせる為の道具』として使おうとしていたらしい。文献にはそうあった」

オメガナイト「なるほどな……だが、リアライズさせるにしても、メダロット一体程度では幼年期のデジモンくらいしかリアライズできないぞ?」

アトム「うむ。わしも、それが気になって個人的に調べておったのだがな……どうやら、メダフォーエスを使えば、成長期以上のデジ

モンもリアライズできるようになるらしい」

アトム博士の言葉に、東郷達は衝撃を覚える。

美森「成長期以上のデジモンも・・・!!」

園子「メダフォースには、それだけのエネルギーがあるってことだね・・・」

十蔵「そうだ。それをあのデジモンは、何らかの手段で知ったのだろう・・・私を騙し、メダフォースを集めさせたのだ。自らがリアライズする為に」

そうして、一頻り語り尽くした後、十蔵は沈黙した。
真実を知ったとて、時既に遅し。最早成す術はない。

友奈「んーと・・・つまり、メダフォースを集めればパイルドラモンをリアライズできるってこと？」

友奈の、その一言が無かったならば。

アトム「っ！それだ!!その方法ならば・・・!」

美森「ロクシヨウ、行ける?」

ロクシヨウ「それしか手段が無いのなら」

友奈「メタビーも、やれる?」

メタビー「なんかよくわかんねーけど、やるしかねーよな!」

chapter 21 降臨、オメダモン

十蔵「いいか？お前達のメダフォースを、オメガナイツのパイルドラモンに送る。お前達はただ、メダフォースを発してくれば良い。後は私の装置がやってくれる」

ロクシヨウ、メタビー、オメガナイツの背中に無線装置のような機械を取り付けつつ、十蔵が説明する。

ロクシヨウ「メタビー、準備は良いか？」

メタビー「やれるだけの事をやるだけだろ」

ロクシヨウ「フツ・・・そうだな」

メタビー「おい、ロクシヨウ」

ロクシヨウ「なんだ？」

メタビー「全部終わったら、ロボットしよーぜ！」

ロボット「良いだろう。お前となら、良いロボットができそうだ・・・」

十蔵「よし・・・始めてくれ！」
準備は整った。

ロクシヨウ「はあああああああ
!!!!!!!」

メタビー「うおおおおおおお
!!!!!!!」

メタビーとロクシヨウがメダフォースを集め始める。

十蔵「どうだ!？」

ドルモン『——駄目だ。エネルギーが足りない。少しだけ足りない』

園子の端末からエネルギー管理を担当しているドルモンの報告に、十蔵は渋い顔をする。

十蔵「やはり二体分だけでは・・・」

友奈「勇者部六ヶ条一つ！なるべくあきらめない!!」

D―3を構えた友奈が叫ぶ。

友奈「アルゴモンに出来たんだ・・・私達にだって、できる!!!」
メタビー「そうだ!!それに、ロボトルに勝つのは、強え奴じゃねー!!」

ロクシヨウ「諦めない方が勝つ・・・か。良い言葉だな!」

オメガナイツ「こんな程度のピンチ、前にも乗り越えられたんだ!

今回だって———!!」

四つの心が一つに合わさった、その瞬間、友奈のD―3から光が溢れ出した!

光はそのまま、装置に繋がれた三体を包み込み卵のような形になると、アルゴモン究極体に匹敵する程の大きさにまで成長する。

美森「な・・・何?」

園子「ドルるん、何が起きたの?」

ドルモン『わ・・・わからない。だが、これは———』

EXTEND

X

EVOLUTION

やがて、光の卵がほどけるように消えていくと、中から全く未知のデジモンが現れる。

美森「ロクシヨウ・・・?」

友奈「メタビーっぽくもあるよ・・・?」

ドルモン『どうやら、メタビーとロクシヨウとパイルドラモンがジヨグレス進化したようだ』

園子「メダロットとデジモンが・・・ジヨグレス進化?」

ドルモン『名付けるとすれば、〃オメダモン〃』といったところかな？』

—オメダモン—

聖機士型デジモン

メタビーとロクシヨウのデータを獲得した結果、誕生した聖機士デジモン。

戦闘においては、頭部に一定ダメージを受けない限り、機能停止せずに戦い続ける。

ナノマシンによる自己修復機能を備えた超金属『サイプラシウムデジゾイド』で造られた装甲は、戦闘で受けたダメージを次戦迄に完全回復することができる。

必殺技は、一斉射撃で敵を穿つ左腕武器『ビートルキャノン』と、どんな敵をも唐竹割りする右腕武器『シザースソード』だ！

アルゴモン「ンンンン???なんだあ、お前……この私に殺られる来たのかア???’」

アルゴモン究極体が気付き、オメダモンと対峙する。

いよいよ、最後の戦いが始まる。

chapter 22 最後の戦い

二体の究極体が相対する。

アルゴモン「今更出てきたところで……!!!」

先手必勝!とばかりに『テラバイトディザスター』を放つ。

迫る無数の光線を、しかしオメダモンは、冷静に『シザースソード』を振るい、弾いてみせた!!

アルゴモン「っ!やるじゃないか……ならばこれはどうだ!!」
続いて、オメダモンを取り囲むように、触手を伸ばす。

対するオメダモンは左腕の『ビートルキヤノン』を一斉射撃!取り
囲まんとしていた触手を撃退せしめたのだった。

アルゴモン「なっ……なっ……なあああ!?!」

驚くアルゴモン究極体の隙を付き、オメダモンは急速接近。そのま
ま『シザースソード』で唐竹割りにし、追撃の『ビートルキヤノン』を
体内に向けて一斉射撃した!

アルゴモン「ぐ……ぐ……ぐあああああああ!!!」

怒涛の連撃にアルゴモン究極体は堪えきれず、完全に消去されたの
だった。

友奈「——やった?」

美森「やったのね……!」

ドルモン『いいや!まだだ!!』

ドルモンからの警告に、勝利ムードに移行しかけていた空気が変わ
る。

ドルモン『ネットワーク内にいる幼年期のアルゴモンが、一つに集
まり始めた!!奴は向こうで、また復活するつもりだ!!』

アトム「なんじゃと!?!それでは対処のしようがない!!」

園子「ドルるん、場所は?」

ドルモン『——メダロット達のネットワーククラウド
だ。通じている場所が分からないから、行きようがない』

美森「そんな……どうすれば」

と、その時だった。

??? 『お困りかしら?』

友奈のD―3から、聞き覚えのある声が聞こえてきたのだ。

友奈「レイさん!!」

レイ『久しぶり。そちらに送ったブイモンから、報告が途絶えたから通信したのだけれど・・・何をすれば良いかしら?』

友奈「じ・・・実はかくかくしかじかまるまるくまぐまという事なんです!!どうかできますか!？」

レイ『独立したネットワーククラウドだなんて、興味深いわね・・・その程度なら簡単よ。はい、おしまい』

ドルモン『——うわ、ネットワーククラウドが観測出来なくなった。何をしたんだい?』

レイ『接続を切り離して完全に孤立させたのよ。これでもう、奴はどこにも行けない』

十蔵「む・・・無茶苦茶が過ぎる」

レイ『それにしても・・・デジモンをリアライズさせられる金属だなんて!!後でサンプルを貰えないかしら?是非とも調べてみたいわ!』

アトム「あー・・・うん。そうじゃな。後でブイモンくんを持たせよう」

レイ『今回の報酬として、受けとるわ♪じゃ、よろしく頼むわね』
それだけ言って、レイからの通信は途切れた。

友奈「——えっと、もう大丈夫?」

園子「じゃ、ないかな・・・」

美森「サクヤモン?」

サクヤモン『話は聞いていた。アルゴモン達が溢れていた穴は無くなったし、アルゴモンの姿もどこにも見当たらない。もう大丈夫だろう』

サクヤモンからのお墨付きに、友奈は思わず脱力して尻餅をつく。
友奈「お……終わったあ……」
こうして、とある八月の一日に起きた事件は、幕を閉じたのだった

……

chapter 23 エピローグ

????
大赦本庁 サイバー課・特殊犯罪対策室

????

数日後

春信「なるほど、そんな事が」

夏凜「らしいわ。私の方は暴走メダロットの対処で忙しかったから、後で知ったけど」

冷房の効いたサイバー課・特殊犯罪対策室内で、三好兄妹がアイスを食べつつ、先日の事件について話し合う。

“藍原の遺産”から端を発するこの事件について、メディアでは「デジタルハザードの再来」等と語っている局もある。

夏凜「まあ、間違っではないわよね。全部あのアルゴモンとか言う人造デジモンが原因なんだし」

春信「しかし、責任の一端を持つ陸十蔵氏は逮捕。メダロットも、ダイパン社が自主回収した。もうメダロットのようなロボットは出てこないかもなあ……欲しかったのになあ……」

夏凜「大丈夫でしょ」

春信「なんで？」

夏凜「兄貴みたいな声が、元メダロッター達から上がってるもの。いずれ、安全性を見直された新しいメダロットが世に出回るようになるんじゃない？」

春信「本当に!？」

夏凜「食い付き良いわね……本当よ。だって——」

????
讚州市内 とある公園

????

友奈「暑いね」

メタビー「暑いな」

ワームモン『二人ともー、もっとしやつきりしなよー』

友奈「だつてえ〜」

メタビー「だつてよお〜」

ワームモン『似た者同士か』

あれから、ダイパン社に回収されたメダロット達だったが、一部の暴走しなかったメダロットは簡単なメンテナンスとリミッターの見直しだけを受けて、持ち主の元へ返された。

メダロットの存続を望む声が多かったが故の措置である。

メタビー「・・・結局さ」

友奈「うん？」

メタビー「アルゴモンの奴、現実世界に出て、何がしたかったんだろーな」

友奈「・・・・・・なんだろうね」

メタビー「——なあ、友奈」

友奈「うん」

メタビー「オレ、旅がしたい」

友奈「うん」

メタビー「いろんな場所に行つて、いろんな物を見てみたい」

友奈「・・・うん。良いと思うよ。私はついて行ってあげられないけど」

メタビー「・・・そっか」

友奈「でも」

メタビー「ん？」

友奈「いつでも、帰ってきていいからね。メタビー」

メタビー「——うん！」

と、そこに東郷とロクシヨウがやって来る。

美森「お待たせ友奈ちゃん」

友奈「ううん、待ってないよ！」

ワームモン『さつきまで暑い〜〜って言って溶けてたくせに』

友奈「ちよつとワームモン!？」

美森「うふふ♪それじゃ——」

ロクショウ「メタビー殿」

友奈「うん」

メタビー「あん時の約束、果たすとすつか！」

Mr. うるち「合意とみてよろしいですね!!!」

友奈「早い!?もう出た！」

Mr. うるちの声に、近くで遊んでいた子供たちも集まってくる。

メタビー「負けても恨みっこなしだぜ？」

ロクショウ「それは此方の台詞・・・参る！」

メタビーとロクショウが構える。

Mr. うるち「それでは——！」

「ロボトルう~~~~・・・ファイトお
!!!!!!」